

## 昭和の東南海地震体験談

氏名: 浜 忠友(はま ただとも)  
生年月日: 昭和3年11月8日  
地震を体験した場所: 那智勝浦町  
当時の家族状況: 父、母、弟(2人)、妹(3人)



### 1) 地震発生時の状況

当時16歳で家は粉白海岸のすぐそばにあった。

地震発生当日、自宅には父と1歳の妹と自分だけで、母は近くで畑仕事に、弟や2人の妹は学校に行っていた。

昼過ぎだったか、それはすごい揺れがあった。すぐに井戸を見に行ったが、第1波が来るときは井戸の水は引いてなかった。引いていくときに井戸の水はなくなる。昔からの言い伝えで、津波が来るときは井戸の水が引いてしまうことを聞かされていた。

### 2) 津波襲来時の状況

第1波はひたひたと静かにやってきた。

対岸の浦神湾から太平洋に突き出した海岸段丘が隠れてしまうほどの高さだった。

前の島も埋まってしまい、それより3mほど高い波だった。津波は現県道のあたりからぶつぶつ川の手前まで押し寄せた後、それは凄まじい速さで潮がグワアと一斉に引いて行った。

その後、対岸の浜まで底が見える程カラカラだった。

父親は地震がゆったあと、幼い妹を残したまま一人で逃げ出してしまったので、自分は妹を抱きかかえたまま沿道に飛び降りた。

仕事が運送屋のはしりの馬力をしていたので、家に馬を飼っていた。普段走らない馬が何かを察したのか、その馬ですぐ裏のふところ山まで一気に駆け上がることが出来た。

ほんのしばらくすると3波も引き、落ち着いたので馬を縛って山から下りた。

逃げるときも地面がドンドンと揺れたため立ってられず、小母さんたちは這いながら「世直し、世直し」と言いながら逃げていた。土地が割れるほどの上下の揺れで落ち込んだらどうしようと思うほど恐かった。

### 3) 家族の行動・被害

家族の誰にも被害はなかったし、家屋にも被害はなかった。

家財道具など持ち出す余裕もなく、命からがら逃げた。

#### 4) 集落・周囲の被害

近所の人にも人的な被害は一件もなかった。

浸水は旧国道 42 号線沿いに建っている家にまで及んだ。近所の家が津波でザーッと倒れた。近くを流れるぶつぶつ川に砂が入ってしまい、生活用水に不自由した。

高芝地区は堤防があり、津波は太田川に入って行ったため、浸水等の被害はなかった。

#### 5) 地震・津波後の生活

地震の前もともと食べるものがなく、地震の後、特に食料に不自由したという実感はない。

食べるものを探すのに一生懸命で、浜に打ちあがった昆布を拾って来て、刻んで、おかゆに入れて食べたりもした。

#### 6) 次の災害への備え

次に地震が揺ったら、とにかく高い所に逃げることを心がけている。

近隣の下里小学校の裏山が避難所になる。

#### 7) その他

以前粉白海岸にあった地石で積み上げられた何段かになった4mほどの高さの堤防が何らかの事情で取り除かれたことを、非常に残念に感じている。今度大津波が来た時に、その堤防がないことによって、何らかの影響が出ないかと懸念している。